

栄蔵の死

宮本百合子

青空文庫

(一)

朝から、おぼつかない日差しがドンヨリ障子にまどろんで居る様な日である。

何でも、彼んでも、灰色に見える様に陰気な、哀れっぽい部屋の中にお君は、たった独りぼつちで寝て居る。

白粉と安油の臭が、プーンとする薄い夜着に、持てあますほど、けったるい体をくるんで、寒そうに出した指先に反古を巻いて、小鼻から生え際のあたりをこすったり、平手で顔を撫で廻したりして居たけれ共一人手に涙のにじむ様な淋しい、わびしい気持ちをまぎらす事が出来なかった。

切りつめた暮しを目の前に見て、自分のために起る種々な、内輪のごたくさの渦の中に逃げられない体をなげ出して、小突きあげられたり、つき落されたりする様な眼に会って居なければ、ならない事は、しみじみ辛い事であった。

こんな、憂目を見る基を誰がつくつたと云えば皆、智恵の少ない自分の両親である。内々の事を何一つしらべるでもなく只「血統き」と云う事ばかりをたのんで、此家へ自

分をよこした二親が、つくづくうらめしい気になった。

いくら二十にはなつて居ても母親のそばで猫可愛がりうまにされつけて居たお君には、晦日におてつぱらいになるきつちりの金を、巧くやりくつて行くだけの腕もなかったし、一体に、おぼこじみた女なので長い間、貧乏に馴れて、財布の外から中の金高を察するほど金銭にさとくなつて居るお金の目には、何かにつけて、はがゆい事ばかりがうつった。

車で来る、八百屋からの買物を一文も価値切らなかつた事などで、お君は、いつもいやな事ばかりきかされて居た。

「お前の国では、庭先に燃きつけはころがつて居るし、裏には大根が御意なりなんだから、御知りじゃあるまいが、東京つてところはお湯を一杯飲むだって、ただじゃあないんだよ。

何んでも、彼でも買わなけりやあならないのに、八百屋、魚屋に、御義理だてはしてられないじゃあないかえ。

お君位の時には、まだ田舎に居て、東京の、トの字も知らなかつたくせに、今ではもうすっかり生粋の江戸っ子ぶつて、口の利き様でも、物のあつかい様でもないやに、さばけた様な振りをして居る癖に、西の人特有の、勘定高い性質は、年を取る毎にはげしくなつて

行つた。

人の見かけを、江戸前らしく仕度てるために、内所の苦勞は又、人なみではない。

嫁には、無理じいに茶漬飯を食べさせて置いて、自分は刺身を添えさせ、外から来る人には、嫁が親切で、と云いたいたちであつた。

赤の他人にはよくして、身内の事は振り向きもしない。お君の親達は「百面相」だの「七面鳥の様な」と云つて居た。

それでも、叱られ叱られ毎日、朝から晩まで、こせこせ働いて居たうちは、いろいろな仕事に気がまぎれて、少時の間辛い事を忘れて居る様な時もあったけれ共、こう床にいたつきりになつて、何をするでもなくて居るのは只辛い事ばかりが思われて、お君はいかにもいやであつた。

顔の真上からお金の厭味を浴びなければならない。

それだけでさえも、気のせまいお君には、堪えるのが一仕事である。

始め、妙に悪寒がして、腰が延びないほど疼いたけれ共、お金の思わくを察して、堪えて水仕事まで仕て居たけれ共、しまいには、眼の裏が燃える様に熱くて、手足はすくみ、頭の頂上てっぺんから、鉄棒をねじり込まれる様に痛くて、とうとう床についてしまった。頭に、

濡手拭をのせて、半分夢中で居るお君の傍でお金が、

「お前もう何^{なん}なんだろう？

一人口が殖えると、又なかなかだねえ。

それにしても、あんまり早すぎるじやあないかい。

と、いやあな顔をして云ったのが、今でもお君の眼先にチラツいて、それを思い出す^た度に、何とも云えない気持になつて涙がこぼれた。

冷え込みだろう、と云つて居たのが、三日たつても、四日立つても、よくなく益々重るばかりなので、近所の医者に来てもらうと、思いがけなく悪い病気で、放つて置けば、命にまでさわると云われた。

お医者の方云つた事は、お君に解^{わか}らなかつたけれ共、十中の九までは、長持ちのしない、骨盤結核になつて、それも、もう大分手おくれになり気味であつた。

流石^{さすが}のお金も、びつくりして、物が入る入ると云いながら翌日病院に入れて仕舞つた。

いよいよ手術を受ける時になつて、病氣について、何の智識もないお君は、非常に恐れて、熱はぐんぐん昇つて行きながら、頭は妙にはつきりして、今までぼんやりして居た四辺の様子や何かが、はつきりと眼にうつつた。

胸元から大きな丸いものがこみ上げて来る様な臭いの眠り薬、恐しげに光る沢山の刃物、手術のすみきらない内に、自然と眠りが覚め^さかかつてうめいた太い男の声、それから又あの手を真赤にして玩具をいじる様に、人間の内実^{なかみ}をいじって居た髭むじやな医者^なの顔、あれこれと、自分が無我夢中になる前五六分の間に見た事聞いた事が、それより前にあつた百の事、千の事よりもはつきりと頭に残つて、夜中だの、熱のある時は、よく、此の恐ろしい様子にうなされて居た。半月ほど、病院のどつちを向いても灰色の淋しい中に暮して、漸々、畳の上に寝る様になつてからまだ幾日も立つては居なかつた。けれど、絶えずせせこましい気持ちになつて居るお君には、一日の時間も、非常に長い、非常に不安心なものであつた。

お君は、思い出に一杯になつた体を、溜息と一緒に寝返りを打たして、今までとは反対の壁側に顔を向けた。

「母はんは、苦勞ばかりお仕やはつても、いい智恵の浮ばんお人やし、達^{たつ}やかて、まだ年若やさかい、何の頼りにもならん。

たよりにならない、母親や弟の事を思つて、お君はうんざりした様な顔をした。

誰か一人、しっかりとつ附^ついて居て安心な人を望む心が、お君の胸に湧き上つて、目の

前には、父親だの母、弟又は、家に居た時分仕事を一緒にならつて居た友達の誰れ彼れの顔や、話し振りがズラツとならんだ。友達共は、皆相当に、幸福に暮して居るのに、自分は今どうして居るのだらうと思うと、薄い眉根にくしゃくしゃな「しわ」を寄せて、臭い様な顔付をした。

そして、さのみ氣が乗つたでもない様にして、枕元の小盆こぼんの傍に小寒く伏せてあつた雑誌を取りあげた。お金が小やかましいので、日用品以外の物と云つたら、自分の錢で買ふ身のまわりの物まで遠慮しなければならぬ中を、恭二がお君のために買つて来てくれたたつた一冊いっさつの雑誌である。

幾度も幾度も繰り返して、まるで、餓えた犬が、牛の骨をもらいでもした様にして見るので、銀地へ胡粉で小綺麗な兎を描き、昔の絵にある様な、樹だの鳥だのをあしらつた表紙も、もう一体に薄墨をはいた様になつてしまつて居る。

そのぼやけた表紙から、はじけた綴目から、裏まで細々と見てから、中についた幾枚もの写真を、はたで見るものがあつたら仰天する位の丁寧さでしらべて行つた。

何々の宮殿下、何々侯爵、何子爵、何……夫人、と目にうつる写真の婦人のどれもどれもが、皆目のさめる様な着物を着て、曲らない様な帯を、それをとめている帯留には、

お君の家中の財産を投げ出しても求め得られない様な宝石が、惜し気もなくつけられて居る。

どの顔にも、——それは年取ったと若いとの差は有つても——満足して嬉しがって居らしい、又金持らしい相があると、お君は思った。

これにくらべて見ると、いつだったか、夜一寸出た時に、おじいさんの卜者に見てもらった時に、

貴方は、苦勞する相ですぞ。

氣をつけんきやあならん、なあ、

金と子の縁にうすいと出て居る。

と云われたのが事実らしく思われて、暗い氣持になった。

帯の結び様でも、指環の形でも、いつの間にか、見も知らなかった様なのが出て居た。

お君は、一つ一つの写真について頭から爪つまさき先まで身のまわりの物の値踏をしはじめた。

この着物も、本場なら六十円を下らないが、一寸でも臭さければ、私にだって着られる。この指環だって、ここに一つ新ダイヤが入って居ようものなら、八百円のは、せいぜい六七十円がものだ。

写真で、真もの^{ほん}のと、「まがい」の区別はつかないから都合がなるほどいいものだ。

着物だの飾り物に、ひどい愛着を持つて居るお君は、見も知らない人々が、隅から隅まで隆とした装で居るのを見るとたまらなくうらやましくなつて、例えそれが、正^{しょうめい}銘^{めい}まがい無しの物でも、自分の手の届くところまで、引き下げたものにして考えて居なければ気がすまなかつた。

少しは読み書きも明るいけれ共、根^{こん}のないお君は、ブーツと写真だけ見てしまうと、邪険に、雑誌を畳に放り出して、胸の上に手をあげて、そそくれ立つた指先を見て居た。

こんなみじめな指^{ゆび}をして居ては、若し、さつき彼の人のほめて居た様に、いい指環があつたにしろ、気恥かしくて、はめられもしない事だろう。

ああ云う着物が山ほど有つても、寝て居るんじやあ、お話にもならない。

などと、とりとめのない事を考えて居ると、水口の油障子が、がたごと云つて、お金が帰つて来た。

薄い毛を未練らしく小さい丸鬚にして、鼠色のメリンスの衿を、町方の女房のする様に沢山出して、ぬいた、お金の、年にそぐわない厭味たつぷりの姿を見るとすぐお君は、無理な微笑をして、

お帰りやす

と云った。

一通り部屋の中をグルツと見廻して、トンと突衿をすると一緒に、お君のすぐ顔の処へパフツと座ったお金は、やきもちやきな、金離れの悪い、五十女の持つて居るあらゆる欠^け点を具えた体を、前のめりにズーツとお君の方に延^のしまげた。

誰^だあれも来やしなかつたろうね。

時にどうだい。お前は、

ほんとうに、もうあきあきするほど長い事^こつちやあないかい。

もうあの日^ひつから、何日目になるだろう。

こおつと、

あれは——何だつたろう、お前、先月の十一日頃だつたろう、

それだものもうざあつと、一月だよ。

自分の、すぐ眼の上で、ポキポキと音の出る様に骨だらけな指を、カキツ、カキツと折りまげるお金の顔を、お君はキョトンとして小供の様に見て居た。

けれ共、どつか、そつ方を見て居たお金が、切った様な^{まぶた}瞼を真正面お君の方に向けて、

ホヤホヤとした髪をかぶった顔を見つめた時、何か、お腹なかの中に思つて居る事まで、見て仕舞われそうな氣持がして、夜着の袖の中で、そつかりと、何のたそくにもならない、色のあせた袖裏を掴つかんで居た。

いつんなつたらよくなる事だろうねえ、ほんに、困りもんだ。

そうやってお前に寝つかれて居ると、どれだけ私わたしは困るか、知れやしないんだよ。

實際のかくさない処がねえ、

藥代、お礼、養いになるものは食べざあなるまいし。

そうじゃあないかい。

お父さんと、恭二の働きが、皆お前に吸われて仕舞う。

病氣で居るのに何もわざわざこんな事を聞かせたくはないけれ共、一つ家の中に居れば、そうお人をよくしてばかりも居られないからねえ、

ほんとうに、どうかしなけりやあ、ならないよ。

ホーと豆まめくさ臭い吐息がお君の顔を撫て通つた。

自分の夫の良吉にかくして小錢をためたり、息子の恭二と父子が出かけたあとは食事時の外大抵は、方々と話し歩いて居るお金が、たまらなく小憎らしかった。

みじかい袂に、袂糞と一緒にたに塩豆を入れたりして居る下等な姑から、こんな小言はききたくないと云う様な気にはなつても、気の弱い、パキパキ物の云えないお君は、只悲しそうな顔をして、頭をゆすつたり夜着を引きあげたりするばかりであつた。

病氣になつたその日からお君は絶えず、

どうしよう

と云う感じに迫られて居た。

この考えは、何事をもたじたじにさせた。

只どうしようと云うばかりに国許へは一度も知らせてやらなかつたし、弟に来てくれとも云つてやらなかつた。

それが、どう云うわけと云うではなく、只、どうしていいか見当のつかない様な心から起つた事である。

塩からく、又生ぬるい涙が、眼尻りから乱れた髪の毛の中に消えて行つた。

お金は、行こうともせずにピツタリお君のわきに座つて居る。

お君は、救を求める様に、シパシパの眼をあいたりつぶつたりして居ると耳元で、何か
が、

「お父さんに来てもろうたがいい

と云う様にした。

お君は、いかにも嬉しそうに、パツとした顔をして、一つ心に合点すると共に、喜びを押えつけた様な低い鼻声で、

「父はんに、来てもらおうと思うとるんやけど、どうどましようなあ。
と云った。

そうさねえ、それも悪かあるまいよ、
来てどうにかなればねえ。

けど、何んに来たんやら分らない様にして、只食べるばかりで帰られちゃあなお尚だが。

そいで、まあ、父さんでも来たら何ぞつて云うあてがあるのかい。

「別に何ぞつて――

お君は、がっかりした様な声で眼の隅から鈍くお金を見て返事をした。

「とにかくそいじゃあそうして見るがいいさ、いくら彼んな人だって男一匹だもの、どうにかして行くだろうさ。

お君は、今先ぐにも手紙を書こうかと思つたけれ共、両眼ともが、半分盲^{めし}いて居る父親が、長い間、臭い汽車の中で不自由な躰をもんで、わざわざいやな話をききに來なければならぬのを思うと、髭^{ひげ}を物臭さに長く生やして、絶えず下目をしてボツボツ低く話す、哀れな父親の姿が目前に浮いて見えた。

父親がきの毒で、一時は、書くのを止めようかとも思つたけれ共、さりとて、黙つたまますむ事でもないので、ロール手紙に禿^ちびた筆で、不様な手紙を書き始めた。

まとまりのない、日向の飴の様な字をかなり並べる間、お金は傍に座つて筆の先を見ながら、自分の息子にあまり益のない嫁を取つた損失を考えて居た。

始め、恭二を養子にする時だつて、もう少しい家から取るつもりで居た目算が、ひよんな事からはずれて先の見えて居る家などからもらつてしまつたし、又お君でも、いくら姪^{めい}だと云つても、あまり下さらない女をもらつてしまつて、一体自分等は、どうする気なんだろうと云う様な事を思つて居た。

嫁の実家、又は養子の実家のいいと云う事は、なかなか馬鹿に出來ないものなのに、フラフラと出來心でこんな事をして、揚句は、見越しのつかない病氣になんかかかれて、食ひ込まれる……

お君が半紙をバリバリと裂いた音に、お金の考えが途中で消えた様になって仕舞った。

アア、アア

とけつたるそうな、生欠伸をして、

「さあ御晩のしたくだ、

この頃の水道の冷たさは、床の中では分らないねえ。

と云つて、ボトボトと立ちあがつた。

「ほんにすまん事、

堪仁しとくれやす。

と云いながら「いやになり申候」と書き切つて頭をあげると、すっかり知らない間に陰が濃くなつて、部屋の隅のものは只うす黒く浮いて見えるほどになつて居た。

小窓からも、縁側からも入った奥に居る自分の近所は、気がつけばつくほど暗くて、よくまあ、これで物が書いて居られたと思うほどであつた。

狭い狭い台所で、水のはねる音を小うるさくきながら、^{おつと}夫や舅の戻らないうちにと、筆の先に視力を集めて、はかの行かない筆を運ばせた。

一枚半ほどの手紙を書き終つた時、パツト世界が^{かわ}変るほど美しい色に電気がついた。

大きな字で濃く薄くのたくった見つともない手紙を、硯のわきに長く散らばしたまま、お君は偉く疲れた気持で、ストンと仰向になった。

瞼の上には、眠気が、甘ったるく、重く、のしかかつて来る。

やがて、恭二などが帰って来る頃なので、髪をまとめるつもりで頭に手をやりはやつても、こらえきれないねむたさに、その手をどうにも斯うにもする事が出来なかった。

二時間ほどして、二人が戻った頃には、お君は、黄色い光の下で、たるんだ顔をなげ出して、いびきをかきながら夢も見ない眠りに陥ちて居た。

(二)

何かにつけて頼りになるべきお君の実家は、却って自分が頼られるほど貧しい、哀れな生活をして居た。

元は村のかなり好い位置に居て、人からも相当に立てられて居た身も、不具者になっては、どうともする事が出来ない。

生きなければならぬばかりに栄蔵（お君の実父）は、自分より幾代か前の見知らぬ人

々の骨折の形見の田地を売り食いして居た。

働き盛りの年で居ながら、何もし得ないで、やがては、見きりのついて居る田地をたよりに、はかない生をつづけて行かなければならないと云う事を思うと栄蔵の胸は堅くな^{かた}って仕舞う。

家中のものからたよられて居る身であるのを思えば、自分の男だと云う名に対しても斯うしては居られない氣になった。

けれ共、勿論働く方法も見つからなかった。栄蔵は、一思いに、体の半分が無くなった方がどれほど楽か分らないと思うほど、刻一刻と世の中が暗くなる「そこひ」と云う因果な病にかかった事を辛がった。道を歩くにもすかしすかししなければ行かないほどになつてからは、自分でも驚くほど、甲斐性がなくなり、絶えず、眼の前に自分をおびやかす何物かが迫つて居る様に感じだした。

物におどおどし、恥しいほど決断力も、奮発心も失せてしまった。

貧と不具にせめさいなまれて、栄蔵の神経は次第に鈍く、只悲しみばかりを多く感じる様になった。

今度お君を自分の妹の家へやるについても、栄蔵の頭には、これぞと云った父親らしい

まとまつた考えは何一つなかった。

只、母親のお節が、狭い村中の母親共に「ほこり」たいため、チンとした花嫁姿が一時も早く見たかったため殆ど独断的に定めてしまったと云つてもいいほどである。

氣心の知れない赤の他人にやるよりはと云い出したお節の話が、お節自身でさえ予氣して居なかつたほど都合よく運んで、別にあらたまつた片苦しい式もせず、お君は恭二の家のものでなつてしまつた。

田舎に居て、東京の様子に暗い夫婦は、血縁と云うものが、この世智辛い世の中で働く事を非常に買いかぶつて、当座は大船にでも乗つた様な氣で居た。けれ共、折々よこすお君からの便り、又、東京に居る弟の達からの知らせなどによると、眉のひそまる様な事がやたらとあつた。

「どこもこんなもんよ。」

栄蔵は、若いものには苦勞させるのが藥だと云つてさほどにも思つて居なかつたし、又、今となつてどう云つたところで、始まらないともあきらめて居た。

娘があんまり利口りこうでもないしするから、片方の口は信じられないと、女の子によほど心を傾けて居ない栄蔵は、やきもきして、どうにかせずばとさわぐお節をなだめて居た。

仕舞には、きつと、

「今になって、何や彼やわしにやかましゆう云うてんが、知らん。

お前が、せいて、早う早う云うてやつたんやないか。蒔いた種子位、自分で仕末つけいでどうするんや。勝手もいいかげんにしとけ。

と、とげとげしい言葉になって、氣まずく寝て仕舞うのが定だった。

暗いランプの灯の下で、栄蔵はたのまれて書き物をして居る。

落ちた処ろどころをそろわない紙で抑えた壁に、大きな、ぼやけた影坊子が、身じろぎもしないで留まって居る。赤茶色の筆筒、長火鉢、蠅入らず、部屋のあらいざらいの道具が、皆、テラテラ妙に光って、ぼろになった畳と畳との合わせ目から夜氣がつめたくすり込んで来る様だった。

火の氣のない、静かな、広い畑の中にポツツリたった一軒家には、夜のあらゆる不思議さ、恐ろしさ、又同時に美しさも、こもって居る。

年を取って、もう、かすかな脈が指にふれるばかりのこの人でさえも、あまりの静けさ、あまりの動かない空氣の圧迫に驚いて、互に顔を見合わせ、

「静だすえなあ。

と云うほどであつた。

弱い弱い視力を凝らして、堅い字を、罫紙にならべて行くうちに眉間みけんが劇しく痛んで、疲れのために、字のかくは離れ離れになり、字と字の間から、種々なまぼしい光線が出て、こちやこちやに入り混つて、到底見分けて居られなくなった。

紙をまとめて、机代りの箱の上にのせ、硯に紙かみの被をし筆を拭くと、左の手でグイと押しやつて、そのまんま燈あかりの真下へ、ゴロンと仰向になつた。

非常に目が疲労すると、まぼしかるべきランプの光線さえ、さほどに感じない様になるのだ。

黒い眼鏡の下に、一日一日と盲いて行く眼をつぶつて気抜けのした様な、何も彼にも頭がない様な顔をして居た。

なげ出した顔をお節の方から見ると、明らかに骸骨の形に見えた。

非常に頬骨が高い性たちの所へ大きな黒眼鏡をかけて居るのでそれが丁度「うつろ《洞》」になつた眼窩の様に、齒を損じた口のあたりは、ゲツソリ、すぼけて見える。

お節は、つぎものの手を止とめて、影の薄い夫の姿を見入った。

地の見える様な頭にも、昔は、左から分けた厚い黒々とした髪があつたし、顔も油が多く、柔い白さを持つて居た。栄蔵の昔の姿を思い浮べると一緒に、小ぎつぱりとした着物に、元結の弾け弾けした、銀杏返しにして朝化粧を欠かさなかった、若い、望のある自分も見えて来た。

無意識に手をのぼして、自分の小さい櫛巻にさわった時、とり返しのつかぬ、昔の若さをしたう涙が、とめ途もなくこぼれた。

涙に思い出は流れて、目の前には、不具な夫の小寂しい姿ばかりが残るのである。

ややしばらく身動きもしないで居た栄蔵は、片手をのぼして、お節の針箱のわきから、さつき来た手紙を取った。

娘の手蹟を、なつかしげに封を切つて、クルクルクルと読んで仕舞うと、ポンと放り出して、

「あかん。

とうめく様に云った。

「何んや、

どこからよこいたんどすえ。

「東京——お君からよ。

病気になって、偉う困つとる云うてよこいたんや。

腰の骨が膿んだ云うてやが、そんな事あるもんやろか、
とんときいた事はあらへんがなあ。

「え？　腰の骨が膿んだ。

まあまあ、どうしたのやろ、

あかんえなあ。

そいで何どすか、切開でもした様だつか。

「うん先月の十一日に切ったそうや。

もう一月やな。

そいに、何故、もつと早う云うて来んのやろ。

何と思うて、今まで、延ばしよったんか、そいやから彼の娘、いつもいつも抜けや云
われるんや。

「ほんにまあ、どうしたんやろか。

去年の『厄』は無事にすんださかい安心しとったになあ、方角でも悪いんやろか、気

がつかなんだが。

「そんな、阿房な事あるもんか、

でも、わしに來い云うてんやが、實際困つて仕舞うなあ。

第一行く金からしてあらへん。

少しばかりの金の事で、度々辛い目にも会つては居ても、親身の娘の病氣となると、余計に、ふだん、欲しくない金も欲しくなつた。

貧亡しても、コンミツションで喜ばれるよりええと云つて、空元氣をつける栄蔵も、お節の心が今となって、しみじみ味わわれた。嫁入りの時作つた小紋の重ねだの、八二重の羽織などにかけた金が今あつたらと、今手元にあつたら、買つて仕舞わないものでもないほど、金の光が恋しかつた。

「そいでもな。

お節は、沈んだ声で、うつむいて、ひろげた手紙を巻きながら重く口を開いた。

「貴方^{あんた}行んでおやんなはれ。

あんなに、常々つけつけ云うお金はんやさかい、どんな事云われとるか知れんやさかい。な、私で話が分るんなら行んでも来ようが、こう云う事は、女子ではらちが明かんさ

かいな。

病気になった時、親にはなれて居るほど心細いものはあらへん。

汽車賃位いどうでもしまっさかい。

「私が行く様ようなわしたら汽車代だけやすまん。

お金奴、あらいざらいの勘定をさせる魂胆なんやから、素手でも行かれんわな。

お節は、いざ栄蔵が行くとなると、ぜひ持たしてやらなければならぬ金高を胸算用した。

汽車賃、小使い、お君へかかったものの勘定、あれやこれやではなかなかさかさ立つても、出せないほどの高たかになった。

筒袖を着物の様に合わせた衿に深く顎あごを埋めて、金の出所をお節は思案した。

東京の様な質屋めいた家もないではないけれども、栄蔵の元の位置を考えれば、まさかそんな事も出来ないし、今急に、少しでも田地を手ばなす気にもなれなかった。

「ほんにどうかならんかな。

お節は意地のやけた様に、玉のないそれでも本銀の簪かんざしで、櫛巻にした少しの髪の間を掻きながら、淋しそうに、ランプの灯の前に散って来る細かい「ふけ」を上眼に見て居た。

別にいい考えも浮んで呉れない。

「ま、何せ、旅費位、どうでもなるんやさかい、
ほんにいんどくなはれな。

今、十五六円ばかり、すつかりで、ありまつきかい。そい持ってお行きやはったら、
ようおつしやろ。

仕事の手間や何かで、私など、どうでもして行かれまっから。

お節は、気のすすまなそうに、行くとも行かんと云わずに、ムツつりして居る栄蔵の
顔を見た。

「そやな、

どうでも行かずばなるまいかな。

ほんに、私も貧乏な懷で、金のぱつぽと出入する東京には、行きとくない。

戻つて来る時、財布は、空っぽになつとつてる様やったら、随分、何だろが。

あらいざらいの金を、お手っぱらいに出した後あとをどうするのだろうと云う懸念が、栄蔵
の頭からはなれなかった。

けれ共、行かないわけには行かない。

「お君も、縁に薄い子だすえなあ。

貧乏な親は持つし、いやな姑はんに会うし。

そいに、何ぼ何やて、お金はんも、あんな業慾な人やないやろ思うてましたものなあ。
まあ、まあ、

何んも彼も、めぐり合わせや。

私が、いくらややこしいう云うたとて、何んもならへん……

と云うと、お節は、心配にだまり返って、仕事を片づけ始めた。

虎の子の様にしてある二十円近い金を手離さなければならぬのを思つて、寒い様な
気持になつたお節は、ランプの、わびしい黄色い灯かげを見ながら、

「アアアア

と生欠伸をかみころして、生ぬるい、ぼやけた涙をスルスル、スルスル畳にこぼした。

乏しい懷のまま、栄蔵が旅立つて行つてしまつてから、ぽつんとたった一人になつたお
節は、長火鉢の下引出しに入れた五十銭の金のなくならないうちにと一生懸命に人仕事を
した。

かなり困った生活をして居るのに、士族の女房が賃仕事なんかする奴があるかと云つて栄蔵は、絶対に内職と云うものをさせないので、留守の間にと、近所の者達のところから一二枚ずつ、

「一人で居るので、あんまり所在ないから。

と云つて仕事をもらつて来て居た。

出来るだけの事をせんではと一心に思つて居るお節は仕事をたのんだ百姓共が、

「ほんにこの頃は、よつぽどひどい様に見えますなあ。何んしろ、ああやつて旦はんは何もせいで居られては、偉う大尽はんやかて、食い込むさかい無理もあらへん。

と、半分同情的な、半分は見下げ気味な噂をするのに耳もかさなかつた。

一体に百姓女は手先が利かないので、かなりまとまったものもこなせるお節は、困らないで居られた。暖い部屋で、ポツポツ、ポツポツ針を運んで居るお節を見て、村から村へ使歩きをして居る爺の松の助がちよくちよく立ちよつて、親切に慰めるつもりで、伝えふるした様な、評判だの噂さだのを話す事があつた。

隣村のかなりの百姓で、甚さんと云う家がある。その息子に、去年嫁をもらつた。

評判の美人で、男の気には大層入つて居たけれ共、病的に「やきもち」のひどい姑が、

二人で一部屋に居させないほかにして居た。

そうすると、先達つてうちから身重になったところが、それを種にして嫁を出してやろうと謀んで、自分の娘とぐるになつて、息子あてに、中傷の手紙を無名で出した。

「お前の嫁は、作男とんでもない事をしてその種を宿して居る。

お前のほんとの子だと思うと大した間違いだ。

おつつけられないうちに、どうかしたらよかろう。

姑は、それをつきつけては嫁をいびつた。

息子は、信じなかつたけれ共、あんまりせめられ様がひどいので、取りのぼせて、自分で猿轡さるぐつわをはめて、姑の床のすぐ目の前で、夜中に喉をついて仕舞つた。翌朝、姑が目を覚ました時、血だらけの眼をむいてにらんで居た。

松の助は、古い講談をする様にお節に話した中には、こんな事もあつた。
気がまぎれないのでいろいろの事に思いふけて、

「お君もほんに、一気な事をせん様に云うてやらんけりやあなあ、
あのお金ほんに、いびり殺されて仕舞う。

などと思つて居た。

十三の年から東京に出て、他人の中に揉まれて居るあとの達の事、お君の事などが入りまじって心配になって、もう一つそ一思いに、夫婦と、子供等一つつながりになって、ポチャンとやってしまいたくなくなつた。

東京からの便り^{たよ}を待つて、お節は暗い日を送つて居た。

(三)

六年で出て見る東京の町は、まるで、世が變つた様になつてしまつて居る。

栄蔵は、汽車を乗りるとすぐから、うっかり傍見も出来ない様な、氣ぜわしい、塵つぽい氣持になつた。

ぐずぐずして居ると突飛ばされる、早い足なみの人波に押されて広場へ出ると、首をひよいとかたむけて、栄蔵の顔をのぞき込みながら、揉手をして勧める車夫の車に一錢も値切らずに乗つた。

法外な値だとは知りながら、すっかり勝手の違つた東京の中央で、大きな迷子になる事も辛かつたし、十錢二十錢の事に、けちけちする様に思われたくないと云う身柄にない見

えもあつた。

広い通りや、狭い通りを抜けて、走る電車の前を突切る早業に、魂をひやしてお金の家へついたのは、もう日暮れに近かった。

格子の前で、かすかに震える手から車夫にはらつてから、とげとげした声で、

御免

と云つた。

内から首を出したのは、思い通りお金であつた。

栄蔵は一寸まごついた様に、古ぼけた茶の中折れを頭からつまみ下した。

「おやまあ、これはこれは御珍らしい。

さあ、どうぞ、お上んなすつて。

と、栄蔵の手から軽い、すべつとしたカバンを受けとつて、

「お前、お待ちかねの方が御出でだよ。

と奥へ怒鳴つた。

通された茶の間めいた処に座つて、お金が、格子に錠をかけ、はきものの始末をつけて来るまで、周囲の様子を見廻した。

柱でも、鴨居でも、何から何まで、骨細な建て工合で、ガツシリと、黒光りのする家々を見なれた目には、一吹きの大風にも曲つて仕舞いそうに思われた。

小道具でも、何んでもが、小綺麗になつて、置床には、縁日の露店でならべて居る様な土焼の布袋と、つく薯みたいな山水がかかつて居た。

お金は、すっかり片づけて来て、兄の前にぴったりと平ったく座ると、急にあらたまつた口調で、無沙汰の詫やら、お節の様子などを尋ねた。

「ほんにねえ、

私も今度の事じゃあ、どんなに苦勞したかしれやしないですよ。

何しろ、まだ、ここへ来て幾い^どだけでもたたない人なんですしするから、手ぬかりが有つちやあ私の落度だと思つてねえ。

実の娘より心配するんですよ、ほんとに。

病氣の経過だの、物入りだのを、輪に輪をかけて話して、仕舞いにはきつと、自分の益^{ため}になる方へと落して行つた。

栄蔵は、いやな女だと思ひながら、我慢してその話をきき終るとすぐ、お君の部屋へつれて行かせた。

すぐ、襖一重の隔たりなのに、何故、始めから此の部屋へ通さないのかと云う様な、つまらない不平まで起つて来た。

枕元に座ると、お君はもう何とも云えない気持になつて、

父はん、

よう来とくれはつたなあ。

と云うなり、この半年ほどと云うもの堪え堪えして居た涙を一時にこぼした。

「どうや、

母はんが偉う案じとる。

わしも、こんなやさかい、来んとよかろう云うたんやけど、行け行け云うたので出て来たんや。

さほどもあらへんやないか、

やせ目も見えんやないか、なあ。

病後の様に髭を生やして、黒目鏡をかけた貧しげな父親の前に、お君は、頬や口元に、後れ毛をまといっけながら子供の様に啜泣いて居た。

ほんによう来とくれやはつた、

まっとなんたんえ、父はん。

口下手なお君には、これ以上云えなかった。云いたい事が胸先にグングンこみあげて来は来ても、一連りの言葉には、どうしてもまとまらなかった。

お金への手土産に、栄蔵は少しばかりの真綿と砂糖豆を出した。

こんなしみつたれた土産をもらって、又お金は何と云うかと、お君は顔が赤くなる様だつたけれ共、何か思う事があると見えて、お金は、軽々振舞って、

よく見て御出で、

こんなにお君を親切にしてやったのだから。

と云う様に、頼みもしない髪をかき上げてくれたり、茶を入れてくれたりした。

お君には、それが、いかほどか口惜しかった。

お金が台所へ立ってしまふと、お君は父親をびったり枕のそばに引きつけて、ボソボソと低い声であらいざらいの事を話して愚痴をこぼしたり、恨みを並べたりした。

毎月一週間ずつ入院して、病のある骨盤に注射をしたり、膿を取ったりしなければならないので、かなりの物が入る。

金ばなれの悪い姑から出してもらふ事は、いかにも心苦しいと云った。

「そらなあ、

お大尽はんやあらへんさかい辛うおまつしやろとは思つとりますわな。

けど、あんまりどつせ、

わざと私が病んどる様に云うてなはるんやから。三度のものを一度にしても、実家^{うち}ほどええとこあらへんと、しみじみ思いまつせ。

いろいろ下らん事で心配をかけてすまないとか、ほんとに不孝な子を持った因果とあきらめてくれ、などと涙声で云われると、却つて栄蔵の方が、云い訳けをしたい様な氣持になつた。

十円といくらかの錢ほかない貧乏親父をこんなにたよりにして、どうする氣なんだろうとも思つた。

火ともし頃になつて恭二と良吉が局から空弁当を下げて帰るまで枕元に座つたつきり栄蔵はお君のそばをはなれなかつた。

良吉は、飯^{めし}の時に新らしい魚をつけるの、好い酒を爛しろのと云つて居たけれ共、長火鉢の傍にそろつた四つの膳は至極淋しいもので「鰯」の照焼に、盛りっきりの豆腐汁があるばかりであつた。

小盆の上に「粥」と「梅びしお」といり卵の乗ったお君の食事を見て栄蔵は、あの卵は今日だけなんだろうなどと思つた。

良吉は、油つ濃くでくでくに肥つて、抜け上った額が熱い汁を吸う度びに赤くなつて行つた。

義太夫語りの様なゼイゼイした太い声を出して、何ぞと云つては、

「ウハハハハ

と豪傑を気取り、勿体をつけて、ゆすりあげて笑つた。

色の小白い、眼の赤味立つた、細い体を膳の上にのしかけて、せっせと飯を掻込んで居る恭二のピクピクする「こめかみ」や条をつけた様な頸足しを見て居るうちに、栄蔵の心には、一種の、今までに経験しなかつた愛情が湧き上つた。

白い飯を少しずつかみしめながら、自分の娘の夫の若い男の様子を静かに、満足らしくながめて居た。

恭二の人物がいいと云うのではなし、どこがどう可愛いと云うのではないけれど、何とも云うに云われぬ、なつかしみを感じた。

少しばかりの菜でそう長飯しの出来る筈もなく、じきにコソコソと食事が片づくと話が

局の事に渡った。

この不景気で近々人減しがあるので随分惨目なものが多いと良吉が云うと、お金は、すぐその言葉じりをとって、

「けどまあ、『うちの人』や恭二なんかは、永年お役に立って云うので、そんな心配のいらない有難い身分なんですがねえ、そんな人達は、ほんとに気の毒でさあね。

会計の方じゃあ、まあ、おとつあんが居なけりやあと云われるし、取り締りの方では、恭二が年の割りに立てられて居るんだしするから……

良吉は、

「広告はやせよ、

おい、良い加減にしなきやあ、兄さんがあてられるぜ。

と云いながら、お金に油をさし、いよいよ滑らかになる女房の舌の働きに感心して居た。専売局に、朝から晩まで働いて家の暮しを立てて居た。

今年二十三になる恭二にはまだ独立するだけのものは取れなかった。

体は弱し、中学を出たきりなので、これぞと云う働きもない男に、そう十分なものをもくれる慈善家はこの世智辛い世の中には居ない。

恭二は静岡の魚問屋の坊ちやんで、倉の陰で子守相手に「塵かくし」ばかり仕て居たほど気の弱い頭の鉢の開いた様な子だったが十九の年、中学を出ると一緒に、良吉の家へ養子になった。

良吉の妹が口を利いたので、母親がほんとでありながら、愛されて居なかつたので、父親の意志で、恭二は良吉の後継者と云う事になった。

十九にもなつたものを只食わしては置けないと云うので、あらんかぎりの努力をして漸ようよう専売局の極く極く下の皆の取り締りにしてもらつたのは、良吉のひどい骨折りであつた。免職されない代り、目立つてもらふものが増えもしない。

何をしてても要領を得ない様な、飄筆□□なので、とげとげしたもの間を滑りまわるには却つて捕えどころがなくて無事であつた。

お金が口を酸くして、勝手な熱を吹いて居る間に恭二はいつの間にか隣りの部屋に行つてしまつて居た。それに気のついたお金は眉をびりつとさせて、

「又、隣りに入つてゐる。

何ぼ何だつて、あんまりだらしがなさすぎる、

ひまさえあればたたくたしてさ——

と云つてプツつり話をやめてしまった。

良吉は只、ニヤニヤして居る。

金にきたないくせに「やきもち」まで焼くのかと思うと栄蔵は、憎らしい気持が倍にもなつて来た。

しばらくだまり返つて居たお金は、ややしばらく立つてから、真剣にお君の事についての相談をもち出してきた。

お金は良吉でさえびつくりする様な、明細な小使町を、お君のために作つて居た。

いつなおると云うあてもない病人にかかる金の予算はもとより立たないけれ共、月に一週間の入院料、前後のこまこました物入り、薬代などのために、月二十円は余分に入るとお金は云つた。

栄蔵は、身内の事だからそうそう角だった事を云わずに、嫁だと思つて、出来るだけの事をしてくれと云つた。

「そうですよ、勿論。

私は何も、一文も出さないと云うのじゃあなし、勘定書を書いて、はいおはらい下さいとも云いやしませんさ。

けど、私だってよそに来て居るのに、先の様に用立てて居る上に又、あんまりぼんぱん血の様な金をつかつても居られないじゃありませんかい。

あれだって、私は一度だって、返して下さいなんて云った事はないじゃありませんか。

そう云われれば栄蔵の返す言葉がなかった。

去年の中頃に、お節が長病いをした時、貸りてまだ返さずにある十円ばかりの金の事を云い出されては、口惜しいけれど、それでもとは云われなかった。

自分が、それを返す余地がないと知って、余計に見込んで苦しめる様な事をするお金も堪らなく憎らしかった。

話下手な栄蔵は、お金などを云いくるめる舌はどうていないので、否応なしに、お金がやめるまで、じいっとして聞いて居なければならなかった。

話の一段落がつくと、安息所へ逃げ込む様に栄蔵はお君の傍に行った。

若い二人は何か、笑いながら話して居た。

苦勞も何もない様にして居る二人を傍に長くなつて見て居るうちに、これほど大きなものの父であると云う喜びが、腹の底から湧いたけれ共、自分の貧乏を思うと、出かかった

微笑みも消えてしまった。

恭二の顔をまじまじと見ながら、

「貴方も、この様な足らん女子に病んで居られて、さぞ辛氣臭う、おまつしやろが、

どうぞ、たのんますさかい、優しゆうしてやって下さい。

私が目でも見えてどしどし稼^{かせ}げたら、何ぞの事も出来るやろが、もう廃人なんやから、

お君は、貴方ばかりをたよりにしとるんやさかいなあ。

此女^{これ}も、親子縁が薄うおすのや。

と哀願する様にたのんだ。

チラツとお君の顔を見て、軽い笑を口の端の辺にうかべながら、

「ええ大丈夫です、

御心配なさらずと。

とうす赤い顔をして返事をするのを見てお君は、そうやって、たのまれてくれるのも夫なればこそ、ああやって頼んでくれるのも親だからこそと、しみじみ嬉しい気持ちになって居た。

恭二と栄蔵とは、お君を中にはさんで、両側に、ねそべりながら、田舎の作物の事だの、

養蚕の状況などについて話がはずんだ。

そう云う事に暗い恭二が、熱心に、

「そうすると、どうなるんです？」

などと、深く深く問うて来るのを、説明するのが栄蔵には快よかった。

折々、

「な父はん、私も。」

などと、自分の病氣についての事を云い出したい様にして居たけれ共、栄蔵は、種々な話に紛らして、一寸の間も、否いやな話からのがれて居たがった。

お君にあれこれ云わないでも、もう心の中はその心配で、一杯になって居る。

一升徳利に二升入らない通りに、栄蔵の心は、これ以上の心配を盛り切れない状態にあった。

お君を迎えに田舎に行つた時に会つた栄蔵と今の栄蔵とは、まるで別人の様に、恭二の眼にうつつた。

急にすっかりふけてしまつて居る。

前にもまして陰気に、影がうすく、貧しげである。

あれから、半年ばかりの間に、どれほどの苦勞をしたのかしらんと、恭二は、ぼんやりと、無邪気な、子供が鳥の飛ぶのを驚く様な驚きを持って居た。

隣の間の夫婦は、こつちに声のもれないほどの低い声で、何やら話し会って居るらしい。折々、

「フフフフフ

とか、「いやだねえ」

などと云うお金の声が押しつぶされた様に響いて来た。十二時過まで、何かと喋って居た三人は、足らぬ勝の布団を引っぱり合つて寝についた。

恭二が、じきに、フー、フーといびきをかき始めると、急に、夜の更けたのが知れる様に、妙にあたりがシインとなつて仕舞つた。

部屋の工合が違ふので、ゴロゴロ寝返りを打ちながらうかうかとさそわれ気味で、出来は来ても、これからたのみに行つて、金策をしてもらふべき人達を、今になって、あたふたとさがさなければならなかつた。

あの人や、この人や、栄蔵と親しくして居るほどの者は、皆が皆、大方はあまり飛び抜けた生活をして居るものもないので、勢い、同情を寄せてくれそんな人々を物色した。

知人の中には、大門をひかえ、近所の出入りにも車にのり、いつも切れる様な仕立て下の物ばかりを身につけて居ながら、月末には正玄関から借金取りがキツキとやって来る様な、栄蔵には判断のつきかねる様な、二重にも、三重にも裏打った生活をして居る人が沢山あった。

書生時代の友人、同郷人、その様なものに金を借りに出かけるほど栄蔵も馬鹿ではなかった。

散々思い惑うた末、先の内お君が半年ほど世話になって居た、森川の、川窪と云う、先代から面倒を見てもらって居る家へ出かけて見る気になった。

けれ共、考えて見れば川窪へも行かれた義理ではない。お君が、我儘から辛棒が出来ないで、母親に嘘電報を打たせて、代りも入れないで帰って来てしまった事が、今だに先方の感情を害しては居まいかと云う懸念があった。

物事の道理をちゃんちゃんとして居ると思つて事を定めるその主婦が、ふみつけにされた事に対してどう思つて居るかと思うと、どうしても、厚かましく、

どうぞ、これこれでございますから月々いくらかずつ出して下さいませうまいか。とは云えない気がした。

あんな事さえして置かなければ、何も、こうまどわずに有り体に云つてすがられるものと、下らない事に、先の氣を悪くする様な事をした娘が小憎らしかった。あっちこっち烏路^{うろ}ついた最後は、やつぱり川窪をたのむより仕方のない事になった。

娘に相談する氣になつて、

「お君起きてんか？」

と云つた。

「何え、父はん。

「私もな、今つくづく思うて見たんやが、金出してもらうにしろ、どいだけずつ入るんやかはつきり知れんでは、うちあかんさかいお前見つもつて見てんか。さつきも、お金^が云うてやが、月々二十円ずつ入るやそうやが、ほんまかい。

若しそんなだったら、もう私の力ではどむならん。

「二十円え？」

母^{かあ}はんがそう云つといしたかの。

そんな事、あるもんどすか、

十円も、もろうてあればようまつしやろよ、

何んも、偉う高えもの食べるやなし、一週間入院する『はらい』さえ出けたらええですもの。

「それで、入院するに、どの位入るんや。」

「そやなあ。」

下等の病氣に入とるのやさかい八九円だつしやろ、

いろいろなものを交ぜて。

それに、あそこの院長はんが親切なお人で、何んでも^な廉^{やす}うしとくれやはるんさかい。

「そんなら十円あれば、まあええのやな。」

そう云うわけやつたら^{わし}私も、どうぞして十円ずつは出してもらうようにしよう。

「出してもらう？　誰にえ。」

「月に十円ずつ出しとくれやす人はなかなかあらへんのやけど、放とくわけにも行かん故、間が悪いけど、川窪はんに出^だいてもらうと思うとるんえ。」

外に誰ぞ、ええ人があるやろか。

「さあ。」

ほんま云えば、川窪はんへそな事云うて行かれんわなあ、父はん、

私が、不首尾な戻り様したのやから、あの奥はんもさぞ氣まずう思うといでやろから……

でも此家^{こちら}へ来て間もなく、挨拶かたがた詫に行たら、どこぞへ行きなはるところやつたが、物を祝つとくれやして、いろいろねんごろにしとくれやはったほどやから、うちで思うとるほどでもないかもしれんが……

「な、そうきめよ、

外にしようがあらへんやないかい。

「そうやなあ。

恭二が、ムクムクとしたので、云いかけた言葉をお君は引こめた。疲れて居る榮蔵は、一寸の静けさの間にすっかり眠ってしまった。

お君は、暗黒い中で、まざまざと彼の時分の事を思い浮べた。

あの時は、まるで、どうも出来ないほど辛いと思つて居たが、今思うと、ほんに何でもない事だったと思うと、

「姑のある家へ行ったら、なかなかこれどころではないものだよ。と主婦がよく云つて居たのに思いあたる。

物事をよく条だてて行く、男以上に頭の明らかな主婦が、自分が今日こうやって、こんな事になやまなければならぬ運命を持つて居ると云う事を胸の中に知つて居て、

「人間は、いづどこで、どう世話になつたり、なられたりするか分らないものだから、不義理はして置けないものだねえ。」

と立つ朝何気なく、他の話に取り混ぜて云つたのではあるまいかとさえ気を廻した。

自分の愚かさから、いつでも行く先へ綱を張る様な事を仕出来して、お君は、淋しい、やるせない涙を、はてしない夜の黒い中に落して居た。

(四)

栄蔵は翌る朝早く川窪へ行くと云つて、来た時の通りの装で出かけた。

半分はもう忘れて居る道を、何としたのか沢山の工夫が鶴端をそろえて一杯に掘り返して居るので、目じるしにして来た曲り角の大きな深い溝も、御影石の橋を置いた家も見失つて仕舞つた。

交番さえも見つからずに、あつちこつち危い足元でまごついて居る間に、馬子に怒鳴り

つけられたり、土をモツコにのせて運ぶ十六七の若者に突飛ばされて、

「眼を明いて歩けやい。」

と云われたりした。

酒屋の御用聞に道を教わつて、何年も代えない古ぼけた門の前に立った時、気のゆるみと、これからたのむ事の辛さに落つきのない、一処を見つめて居られない様な氣持になった。

大小不同の歩き工合の悪い敷石を長々と踏んで、玄関先に立つと、すぐ後の車夫部屋の様な処の障子があいて、うす赤い毛の、ハッキリした書生が、

どなた様でいらつしやいますか。

ときいた。

「こんだ昆田」と云う誰でもが覚えにくがる栄蔵の名字を二度ききなおしてから、奥へ入つて行つたがやがてすぐに客間に通された。

あの茶色の畳の下駄を書生の手でなおされるのかと思うと、心苦しい様だし、又厚いふつくらした絹の座布団を出されても敷く氣がしなかった。

カンカン火のある火鉢にも手をかざさず、きちんとして居た栄蔵は、フット思ひ出した

様に、大急ぎでシャツの手首のところの釦をはずして、二の腕までまくり上げ紬の袖を引き出した。

久々で会う主婦から、うすきたないシャツの袖口を見られたくなかった。

金を出してもらいに来ながら、下らない見栄みえをすると自分でも思っただけ共、どんな人間でも持つて居る「しやれ氣け」がそうさせないでは置かなかった。

自分の前に座った此家の主婦が、あまりにいつ見ても年を喰わないのにびっくりした栄蔵は、一寸行きつまりながら、低いつぶやく様な声で、時候の挨拶、無沙汰の云い訳をし、つけ加えてお君の詫までした。

主婦は、気軽に、お君の身のきまつたよろこびだの、総領の達も、とうとう今年は学校が仕舞いになって後だてが出来て良いなどと栄蔵を満足させる事ばかりを話した。

大層この頃は時候が悪い様だ、お節はどうして居ると云われた時に、漸く栄蔵はお君の事を話し出した。

「同じ結核でも胸につきますよりは、腰骨についた方がよいようでございますから。」と云って、主婦を驚ろかした。

骨盤結核だと聞いた主婦は、もう大方は限りある命になってしまったお君にひどく同情

したが、肺結核より骨盤結核の方がいいそうだななどと云うほど無智な父親を又なく哀れに思つた。

お君だつて、命にかかわるほどではないと、ああ云う女だから思つて居るに違いないし、父親は父親で娘の病が、どう云うものかと云う事を知らずに居ると云う事が、又とない悲惨な事、惨酷な事に思えた。

江戸っ子氣の、他人のために女ながら出来るだけつくす主義の主婦は、自分に出来るだけの事は仕てやる氣になつて、とかく洩り勝ちな栄蔵の話を、言葉を足し足しして委細の事を云わせた。

結局は、栄蔵の顔を見た瞬間に直覺した通り金の融通で、毎月十円ずつ出してくれと云つた。

凡そ一年も出してもらえたらと栄蔵は云つたけれ共病氣の性をよくしつて居る主婦は、とうていそれだけの間になおらない事を知つて居たし、沢山の子供の学費、食客の扶助などで、中々入るから熟考した上での返事がいいと思つて、又明日来てくれれば返事を仕様と云つた。

夕食頃に、川窪の主人が帰ると、栄蔵の話をした。

「お君だって、あんな不義理な事をした事は何と云ったって悪いには違いありませんけど、病気で難渋して居るのを助けてやるのは又別ですからね。

親父だって、ああやって働けもしないで居るんだもの、どんなに気が気でないか知れやしませんよ、可哀そうな。

でも月々十円は中々苦しい。

夫婦は相談して、とにかく一月分だけは明日渡して、栄蔵の村の者へ貸してあるものがあるから、あれを戻す様に尽力してもらって、入ったものの中から出した方が相方都合がよいときめた。

「ああ云う病気は殆んど一生の病気なんですからねえ。

それをあの男は胸につくよりはいいなどと云って居るんですもの。

ほんとうにお君も惨めなりや、あの男だって可哀そうじゃありませんか。

田舎医者位、病気についての智識のある主婦は、いろいろ気を揉んで、どんな人にかかって居るのだろうか、細まごました注意は姑などでとくものではないなどと云って居た。

お君が居た頃から今に居る女中は、

「お嫁に行つてもろくな事はございせんねえ。

お君さんがそんなんでございますか、まあ死ぬんでございますか奥様。

と、如何にも、思いがけない事があるもんだと云う様な顔をして居た。

終いには、

「兎に角、時候が悪いんだねえ一体に。

お前方も、手や足を汚くして爪を生やして居るとあんな大した事になって仕舞うよ。

と、始終土間に下りて居る男の子達に注意したりして、床につく頃には、皆の頭の中にはお君の病氣と云う事が僅かばかりこびりついて居るだけだった。

又明日訪ねる約束をして栄蔵は幾分か軽い、頼り処の出来た様な気持になって、お君への草花を買うとすぐ家へ歸った。

一番待ち兼ねて居た様な様子をしてお金は顔を見るなり飛び出した様な声で、
どうでしたえ

と云った。

中腰になつて部屋の角へ、外套だの、ネルの襟巻だのをポンポン落してから、長火鉢の方へよつて来た栄蔵はいつもよりは明るい調子で物を云つた。

「まだ何ともきまらん。

けど、奥はんが大層同情して、けつとどうぞしてやるさかいに又明日来^き云うてやつた。先の頃の事などパツキリ忘れて会うとくれやはったさかい、ほんに有難かつた。

「そうだろうつてねえ。

何しろ月々十円ずつ余分に吐き出さなきやあならないんだもの。

いやなのは、私共みたいな貧亡人に限つた事っちゃあない。

何と云つても、金の世の中さ。

お金は、川窪なんぞにと云う様に笑つた。

「お前笑うてやが、私が川窪はんへも行かんでお前ばかりにまかいといたら困るやろが、ひとが、云いにくい事云うて来てんに笑うもんあらへんやないか。

お金が口の中で、何かしきりにブツクサ云つて居るのに見向きもしないで、お君の枕元へ行つた。

「お帰り。

お寒おしたろ。

又、義母はんが、何か、やな事云うてやな、

ほんにあかん。

栄蔵は、娘の言葉が、胸の中にスーと暖くしみ込んで行く様に感じた。

新聞を畳んで、栄蔵は買って来た花の鉢をのせた。

真紅な冬咲きの小さいバラの花が二三輪香りもなく曲った幹について居る。

お君は、それを天竺から降った花でもある様に、ためつすがめつながめて賞めた。

大きな声を出してお君が物を云って居るんで、お金は境の唐紙の所の柱によりかかって、親子の様子を見て居たが、二人が頭をつき合わせて一つ鉢の花を見て居て、自分は斯うやって一人で立って居るのかと思うと極く子供っぽいながら、烈しい、うらやみとねたみが湧いて来た。

ああやって、あんなしなびた様な花さえ賞めて居るお君が、同じ口で、どれほど自分の陰口をするのか分らないと思うと、半分は自分で意識しなずに、高い声で、

親子ほど有難いものはないねえ、

親のくれたものだと思うと、袂糞でもおがむだろう。

と云つて口の辺をヒクヒクさせた。

「姑」と云う感じが胸一杯になつて居た。

いつもなら、赤くなつて、だまり返つて居るお君が、力強い後楯がある様に、

「ほんにそうどつせ、

袂糞やて父はんのおくれやはつたものやと思えば有難う思うでのみますわ。

と云い返した。

「そうだろうつてさ、

お前のお父さんは袂糞位が関の山さ。

と捨白辞をのこして、パツパと隣りへ行つてしまった。

「あんまりどつせ、

何ぼ義母はんやかて我慢ならん事云いやはる、ほんに。

お君は、真赤になつて涙をいかにも口惜しそうにボロボロこぼした。

栄蔵は、だまつて、墨色をした鉢と、火の様な花を見ながら深い思いに沈んだ。

何故斯うやつて、仲の悪い同志が不思議にはなれられない縁でむすばつて居るのだらうか。

早く、どっちかが死ねば少しはよくなるだろうのにそうもならない。

自分からして生きたくないのに生きて居なければならぬのも何故だろう。

世の中が、平つたいものであつたら、その突ばなまで一束飛びに飛んで行つて、そこから一思いに、奈落の底へ身でもなげたい様な氣持になつて居た。

恭二が良吉より先に歸つて来ると、お君は何か涙声でボツボツと只氣休めに、養母に頭を押えられて居る力弱い夫に訴えて居た。

氣の置ける夕飯をすますとじきに疲れて居るからと云つて栄蔵は床に入ってしまった。

お君は父親を起すまいと氣を配りながら折々隣の氣合をうかがつて、囁く様に恭二に話した。

川窪で若し断わられたらどうしよう、東京中で川窪外こんな相談に乗つてもらふ家がない。

どうもする事が出来ずに父親が歸りでもしたら又何と云われるか分らない。

それでなくてさえ、

「養母はんはこないだも義父はん云うてでしたえ、

若しお金をどむする事出けん様やつたら私早う戻いて仕舞うた方がええてな。

義母はんは、若しもの時はそうきめて御出でやはるんえきつと。

恭二は、行末の知れて居る様な傾いた実家を思うと、金の無心も出来ず、まして、他の人達にする様にそつと母親の小遣いを曲げてもらうなどと云う事も、母の愛の薄いために此家へ来た位だから到底出来る事ではなかった。

中に入つて板挟みの目に会いながら、じいつと押しつけられて居るより仕様がなかった。
「そんな事は口の先だけなんだよ。

何ぼ何だつてそんな事が出来るわけのものじゃあないじゃないか、
大丈夫だよ。

義母おつかさんがよしそう云つたからつて、私まで同意すると思うんかい。

「そんな事思わんけど……

貴方やかて、血を分けた息子はんやあらへんもん、
なあ。

「そう云えばそれまでだが……

一つそ二人で追い出されて行くさ、

それが一番早く『けり』がついていいじゃあないかい。

何と云う事はなしに恭二の口から世間の味を噛みしめた人の様な口調でこんな言葉がすべり出た。

別にお君をこの上なく美しくいとか、利口だとか又は可愛とかは思つて居るのではないけれど、恭二の心の中には一種、他の愛情とは異つた、静かな、落ついた愛情が萌えて、自分ばかりをたよりにして居る女をかばつてやる事は当然自分の尽すべき事の様に考へて居た。

「自分が居る以上必してそんな事はさせない。

恭二は、十七八の青年の様に真正直に心に思つた。

実の親子でないので余計お君の云う事ばかりが信じられて、留守の間にあれこれ厭味を云われて、わびしく啜り泣いて居るお君の姿をいじらしく想像したりした。

けれ共、正直で気の弱い恭二は、お金の仕打があんまりだと思ふ様な事があつても、口に出して、

「そんな事をしてくれるな。

とは、どんなにしても云えなかつた。

何かいざこざが起つたりすると、目顔ですがるお君を見向きもしないで、盲滅法に、床

屋だの銭湯に飛び込んだ。

そうも出来ない時には、部屋の隅にかたく座って、眼も心もつぶって、木像の様に身動きさえもしなかった。

只、専ら怖れて居ると云う様にして居た。それだから恭二自身も、いざとなった場合はつきり、

私が不賛成です。

と云い切れるかどうかが疑問であつたし、お君も亦、頼む夫が、ふらりふらりして居るの
で、余計、取越苦勞や廻し氣ばかりをして居た。

(五)

烈しい風がグリーン、グリーンと吼えて通る。黄色い砂が津浪の様に押寄せて来ては栄蔵の
鼻と云わず口と云わずジャリジャリに汚して行く。

ややもすれば、飛びそうに浮足立って居る、頭に合わない帽子を右手で押え片方の手に
杖を持って、細い毛脛を痛いほど吹きさらされながら真直な道を栄蔵はさぐり足で歩いて

行つた。

転ぶまい、車にぶつかるまい、帽子を飛ばすまい、栄蔵の体全体の注意は、四肢に分たれて、何を考える余裕もなく、只歩くと云う事ばかりを専心にして居た。

肩や帽子に、白く砂をためて家に帰りつくと、手の切れる様な水で、パシャパシャと顔や手足を洗うと栄蔵は、行きなりお君の前に座つて、懷の煮めめた様な財布の中から、まだ新らしい十円札を出してピタツと畳に起いた。

「どうおしたのえ、それ。」

お君は、びっくりしてきいた。

「川窪はんで、今月の分にとお呉れやはつたんや。」

来月は、どうなるんやか私は知らん。

「何故？」

「国に貸したものがあさかい何の彼の世話やいてもろうとる、あの役場の馬場はんと一緒になつて、幾分なりと入れさせる様にすれば、それから裂いで廻してやろ云うてなはるんや。」

「そいならあの新田の山岸はんの事つたつしやろ。」

あそこの旦那はんと父はんとは知合うてやもん、何でもない事ってつしやる。

「あの先の主人の政吉はんとは知つとるが、この頃では、東京の学校を卒った二番目の息子が何でもさばいて、あの人はもう隠居同然にしとるんやからなあ。ほらあの、父親のつけた名が下品やとか云うて自分で、何男とやら改名した人や。」

金の事になると馬鹿に耳の早いお金がいつの間にか、栄蔵の傍に座って話をきいて居た。
「川窪さんでもよくそいだけ出してくれましたねえ、

内所がいいと見える事。

私はきつと無駄骨だと思つて居たが。

「世の中は、うまく出けたもんで捨る神あれば又拾う神ありや。鬼ばかりは居らへん。

「有難いもんですねえ。

お金は十円札に厭味な流し眼をくれて口の先で笑つた。

「けど何なんでしょう、

それだけで一年分をすませるつもりなんでしょう。

まさか一月分ホイホイ出す人もないだろうから……

栄蔵は、よく丁寧に、田舎の貸金の事を話した。

フム、フム、と鼻をならして聞いて居たお金は話が仕舞うか、仕舞わないに、
「あんだ、ほんとにその世話を焼くつもりで居るんですか。
と短兵急に云った。

「ああ。

「お目出たいわけだ、

返すもんですかね。返さないにきまつてるから川窪さんで、返したらやろうと云った
んでさあね。

馬鹿馬鹿しい、

たった十円で、うまくおっぱらわれて来てさ。

「お前みたいに、何もかも疑ごうとったらきりがあらへんやないか。

川窪はんに限って、そんな事する人は居ん。

おっぱらわれたなんて、私は『強請』^{ゆすり}に行つたんやあらへんよ、

たのんで出して御呉れ云うて来たんや。

「いくら貴方ばかりそうやって力んだっておっぱらわれたに違いないですよ、
私なら、眠ってたってそんな鈍痴^{どち}な真似はするもんか。

漸う巧く見附けたと思つたらすぐポカと手放して仕舞うんだもの、
そんなだから話のらちが明かないんですよ。

「いい加減にしよ、

川窪はんの云いはる事なら間違いないと思うとるんやさかい、ああやって、出来にく
い相談にも乗つてもろうたんやあらへんか。

よりどこのない空世辞を並べる人とは違う、

先代からの人を見て私にはよう分つとる。

「それでもね、時には嘘も方便ですよ。ね、世の中を正直一方に通したら十日立たない
うちに乞食になつてしまふ時なんですよ。貴方みたいな人の好い事ばかり云つて居る人
は、自分の首をちよんぎられても御礼を云うんでしよう。

馬鹿馬鹿しい。

ほんとに『阿呆^{あほう}らしい』つてのは、こう云う事を云うじゃありませんか。

ああ、ああ。

お金は、黒ずんだ菌茎をむき出して、怒鳴り散らした。

栄蔵にも、お君にも、「今月分」として十円だけもらつて来たのがどれだけ馬鹿なのか、

間抜けなのか分らなかった。

家の様子も知らないで、やたらに川窪を疑つて居るお金の言葉に、栄蔵は赤面する様だった。

ああやつて心配して、気合をかけて、病気をなおす人の名や所まで教えた上、痛んだら「こんにやく」の「パップ」をしてやれなどと云つて呉れたあの家の主婦に対して、あまり人を踏みつけた様な言葉を吐かれる度に、裏切つて居る様な感じがして居た。

「お前、そんなに川窪はんを疑うてやが、お前ならどうする積りなんえ？」

「私？」

私なら、きつきと毎月出すと云う書き物でももろうて来る。

「そんな事、出来ると思うとるんか。」

人に金貸して、利息でも取り立てる様に書き物を取るなんて……

こつちは、出してもらかう身分やないか。

一つ首を横に振られれば、二度と迫られない身やないか。

そんな心掛やから、子も何も出来んのえ。

早くから里子にやられて、町方の勘定高い店屋に育ったお金が、あまり金臭いので栄蔵

は今更ながらびつくりした。

一体、人なみより金銭の事にうとい栄蔵の目には、お金の實力より以上に金銭に対して発動する力の大きさ猛烈さがうつった。

あきれて口を噤んだ兄の前でお金は云いたいだけの事を並べた。

夜着をすっぽり被った中でお君は、妹につけつけ云われ目下に見られてされるままになつて居る父親がいたわしく又齒がゆく思われた。

いつか芝居で見た様に小判の重い包で頬をいやと云うほど打って、畳中に黄金の花を咲かせたい気がした。

目の前に、金の事となると眼の色を変えてかかる義母の浅ましい様子を見るにつけ、田舎の、身銭を切つても孫達のためにする母方の祖母や、もう身につける事のない衣裳だの髪飾りなどをお君の着物にかえた母親が一層有難く慕わしかった。

上気して耳朵を真赤にし「こめかみ」に蚯蚓みみずの様な静脈を表わしてお金は、自分でも制御する事の出来ない様な勢で親子を攻撃した。

「何ぼ私が酔狂だつて、何時なおるか分らない様な病人の嫁さんに居てもらいたいんじやありませんよ。若し、何と云つても自分の懷をいためるのがいやだと云うんなら誰の

苦情があつても、子供のないうちにさつきと引き取らせて仕舞う。

頭の先から尻尾しっぽの先まで厄介になりながら、いい様に搔き廻すものをどうして置くわけがあるんです。若し、恭二がかれこれ云う様なら二人一度に出すまでの事さ。

お君だつて家にとつてさほど有難い嫁さんでもないし、又恭二位の男ならどこにだつてころがつて居るわね。

私は、嫁入り先をつぶす様な嫁さんは恐しくて置けないよ。

若し始めつから潰す量見で来たんならもう少し潰しのあるところへお興みこしを据えたらいいだろう。

何も二人に未練はありやあしない。

ああさつぱりしたもんさ、水の様にね。

あんまり調子づいて、心にない事まで云つて仕舞つたお金は、ホツとした様に溜息を吐いて体をぐんなりさせて片手を畳に突いた。

ガリガリと簪かんざしで鬚の根を搔いて居る様子はまるで田舎芝居の悪役の様である。

あまり怒つて言葉の出ない栄蔵は、膝の上で両手を拳にして、まばらな髭ひげのある顔中を真青にして居る。額には、じつとりと油汗がにじんで居る。

夜着の袖の中からお君の啜泣きの声が、外に荒れる風の音に交って淋しく部屋に満ちた。昨日、栄蔵の買った紅バラは、お君の枕元の黒い鉢の中で、こごえた様に凋^{しぼ}んでしまつて居た。

夜になつても栄蔵の怒りが鎮まらなかった。

顔には一雫の紅味もなく、だまり返つて腕組みをしたまま考へに沈んで居た。

お君は、額際まで夜着を引きあげた黒い中で、自分が出されて国に戻つた時の事を、まざまざと想つて居た。

狭い村中の評判になつて、

「お君はんは病気で戻らはつたてなあ、

どうおしたのやろ。

病氣や云うても何の病氣やか知れん、

病氣も、さまざまありまっさかいな。

などと、常から口の悪い、村に一人の女按摩が云うに違いない。

そして、親達には済まない思いなどをするより今いつそ、一思いに川にでも身を投げて

仕舞った方が、どれだけいいかしれない。

お君の眼の前に、病院へ行く道の、名を知らない川が流れた。

あの彼側の堤の木の影の方へ行つて飛び込めば、橋からも遠いし、舟のつないである所からも隔つて居るから見とがめられる様な事はあるまい。

水で死んだもの特有のギーンと張り切った体が水の上にただようて居るのが見えたりした。

義母のひどい事を長々と遺書にして、下駄の上にのせ、大きな石を袂に入れて……

身も世もあらず歎く母親の心を思う時、お君は、胸がこわばる様になった。

始めて目の覚めたお金奴の顔が見てやりたい。

さつきつから洩い顔をして何事か案じて居た栄蔵は、

「私は、今夜の夜行でどうしても立って行くさかい、お前も一緒にお行き。

こんなところに居ては気づかいで重るばかりやないか。

な、そうしよう。

立ちあがって、グングン上前を引っぱりながら出し抜けにそう云った。

「今夜え？」

あんまり急なのでお君はまごついた。

「ああ一刻も早い方がいいんや。

「いくら早い方がいいやかて、あんまり急やあらへんか。

それに、まだ体が動かせんさかい。

「ほんに、

知つとりながらつい忘^{わっ}せてしもうた。

自分だけは立つ積りと見えて、隅からカバンを出して、片づけ始めた。

口を酸くしてもうせめて二日だけ居てくれなければしたい話も仕切れずにあるからと引きとめたけれ共、もう腹立たしさに燃えて居る栄蔵は、

「もう一度きめた事はやめられん。

と云い張つて、どうしても聞かなかつた。

流石にあわてて居るお金夫婦を目にかけて、快い様な顔をして栄蔵は家を出た。

出しなに、お君に、汽車賃から差し引いた一円の残り金を紙に包んで枕の下に押し込んでやつて、川窪から達の事について面白くない事をきいて来た、今度来たらお前から聞いて戒めて置けと云い置いた。

お君は別れの挨拶もろくに出来ないほど悲しがつて居た。

栄蔵の決心は幾分か鈍ったけれど自分の心に鞭打つて恭二に送られて行つて仕舞つた。

二人は、寒い夜道を、とぼとぼと歩きながら淋しい声で辛い話をしつづけて居た。

「哀れなお君を面倒見てやつて下さい、

私の一生の願いやさかいな。

ほんにとつくり聞いといで下さる様にな。

貴方さえ、しつかり後楯になつとつておくれやれば、私は、死んだとて、安心が出る。

時に栄蔵の口から、お金を呪う様な言葉がとぼしり出ると後には必ず、哀願的な、沈痛な声でお君をたのむと云つた。

そう云われる度に恭二は、何とも知れず肩のあたりが寒くなつて、この不具者について不吉な事ばかりが想像された。

何故と云う事もなく、只直覺的にそう思われるのでそれだけ余計、恭二にはうす気味が悪かつた。

まさか「お死になさるな」ともむきつけに云えないので、

「どんな事があつても貴方が達者でいらつしやらなければ……

第一に憂き目を見るのはお君ですからね、唾でも『いざり』でも生きてさえ居れば親と云うものはたよりになるものです。

せいぜい体を大切になさつて、『達さん』の成功するのを見届ける様になさらなければつまりませんものねえ。

いろいろな事は皆その時の運次第なんですから。

云う方も、云われる方も、ひやつこい何となし不安が犇々と身に迫る様に感じて居た。

(六)

余り急に栄蔵が戻つて来たのでお節は余程良い事かさもなければ此上なく悪い事があつての事だと思つてしきりに東京の模様を話せとせがんだ。

重い口で栄蔵はお君の様態、お金の仕打、ましては昨夜急に自分が立つ動機となつたあのお金の憎体な云い振り、かてて加えて達の不仕末まで聞かされて、いやな事で体中が一杯になつて居ると云つた。

「そらな、達も他の事で——まあ病氣やなどで出されるのは仕様あらへんが、女子おなごの事務員に手紙などやって、先方の親に怒鳴り込まれて社から出された云うては顔が立たんやないか。

今時の若い者には武士の魂が一寸も入って居らん。若し戻りよつてもきつと敷居をまたがせてはならんえ。

事によつたら七生までの勘道や。

栄蔵は、自分と同年輩の男に対する様な気持で、何事も、突発的な病的になりやすい十七八の達に對するので、何かにつけて思慮が足りないとか、無駄な事をして居るとか思う様な事が多かった。

「まあ飛んだ事呉れた。

でも、まさか何んだつしやろ、

その事で、出される様な事あらへんやろなあ。

何んしろ十三の時から手離して独りで働いて学校も出、身の囲りの事もしとるのやさかい、手塩にかけんで間違いが出ければ皆、力の足りぬ親が悪いのやさかい……

お節は、二十二になる頃までにはあの社で一かどの者になれる望がこの事で根からひ

つくり返って仕舞わないかと云う不安に、川窪でいずれそうになったら運動もしてくれるだろうが、今度の礼と一緒に念のためにたのんで置けと、まだ着物も着換えない栄蔵の前に硯箱を持ち出したりした。

兄を兄とも思わないで、散々に罵って好い気で居るお金に対して女らしい恨み——何をどうすると云う事も出来ないで居て、只やたらに口惜しい、会う人毎にその悪い事を吹聴する様な恨みが、ムラムラと胸に湧いてお節は栄蔵を叱る様に、

「そやから、あんたもだまって云わいで置かんで、つけつけそな事云うもんやあらへん云うてやりなはればいいに。

だまって聞いてなはるから益々図に乗ってひどい事云うのやあらへんか。」と云った。

先の金を返さないうちは、お金はどうせあなのだと云って、栄蔵は、もう東京の話はせず、早速明日から、山岸の方へ行つて見なければならんと、川窪からもらつて来た心覚えの書きつけだの、馬場のところへ行つて相談しなければならぬ事などを書きとめたりし始めた。

お節は、礼心を送るのだと云って、乏しい中から、香りの高い麦粉を包んだり、部屋

隅の自分の着物の下に置いてある、近所の仕立物を片したりして、急にいそがしくなった様に体を動かして居た。

翌日馬場の家へ行つて、いろいろの事を聞いて来た栄蔵は、その次の日からせつせと山岸の家へ足繁く往来し出した。

役場の仕事もある事だし、複業にして居る牧牛がせわしかったりして、山岸の方へもありせき込んだ話はして居られないので栄蔵が仲に入つた方が結局都合が好かつた。

自分の職業上、相当に位置のある家から、あまり快い感情で遇されない事は、あまり喜ばしい事ではなかつた。

始めの間は栄蔵もお節も山岸とはかねがね知り合いの間だから却つて話もちゃんちやんとまとまつて行きそうに思つて居たが、面と向つて見ると、まるで見知らぬ者同志の話よりは、斯うした事は云い出し難かつたりして思うほどの実も挙らなかつた。

それにまして栄蔵の方が幾分身分が下だと云う事も先方の心に余裕を与えた。

山岸では二三年前に、東京の法律学校を出た息子が万事を締つて、その批判的な頭で生活法を今までとは善い方にも悪い方にも改めた。

山岸の御隠居はんと呼ばれて居る政吉は、二言目には、

「私はもう隠居なんやから、何も知らしてもらえんのえ、やや子と同じや云うてな。

息子の太けうなるもええが、すぐ隠居はんに祭りこまれて仕舞うさかい、前方から思うとつたほど善い事ばかりではあらへんなあ、ハハハハ。

と戯談じようだんにしてしまつては責任を逃れて居た。

隠居は、川窪がそう金の事などにがみがみしない家なのを幸にして、いずれ返さずばなるまい位に思つて居るので、あまり張のない栄蔵のかけ合位ではさほど急せいた氣持にもならず、夜話しに息子と三十分ばかり相談する位の事で、これぞと云う方針などは立ててもなくつた。

若主人が家に一切の事をする様になつてあまりしらなかつた内幕に立ち入つて見ると、父親の名で小千の金が借りてある。

相手が悪いものではないので幾分安心はした様なものの、こんなものまで自分について居てはやりきれないと云う様に、どうしてこいだけ借りたのだと根掘り葉掘り問いただした。

裁判官にきかれる様な氣持になりながら栄蔵は、急に入用になつた事業上の金と、東京に月に二度ずつ出て居るうちに出来た下らない引つ張りの女の始末をつけるために借りた

事を云つて仕舞つた。

そんな訳なので、息子の云い出さないうちは此方こつちからその事を云い出すのも何と云う事はなしてれ気味なので、余計ずるずるになるばかりであつた。

四五度足労をして、もう隠居に話しても仕様がなと思つた栄蔵は、若主人に、細かくいろいろの事を話して、東京の川窪から智恵をつけられた通り、川窪自身が非常に差し迫つた入用があつて居る様に話した。

若主人は、山岸家と書いた厚い帳簿——それもこの人が新らしく始めたのを繰りながら、「いいや何、何ですよ、

貴方が今御話しなすつた様な事情があつたにしろ又なかつたにしろ、川窪さんにあれだけのものを御返しするのは義務なんですから、

必ず何とかします。

何しろ、義務がある以上は当然の事なんですからなあ。

いやに老練な法律家の口振りを真似た様な、体につり合わない声や言葉で云つた。

「必ずどうかする」と云つた言葉を手頼りに、栄蔵はせっせと、鼻つまみにされるほど通つて居た。

もうこうなつては根の強い方が勝つんやから。

栄蔵は、根くらべをする氣になつて居た。

義理がたい栄蔵は、ちよくちよく東京へ手紙をやつては、思い通りの結果が上らなくてすまないとか、氣の毒だとか云つてやつた。

栄蔵が、畢生の弁舌を振つても、山岸の方へは何の効力もなかった。

あまり話がかどらないので、仕舞いにはお金の云つた事がほんとうであつたのかもしれないと思う様になつたりした。

途方に暮れて、馬場へも、度々栄蔵は出かけて行つて二人で出かけて行つた事もあつたけれ共、いつも、變にパキパキした山岸の若主人の口の先に丸められて居た。

「ああなまじ法律を喰いかじつた人は、なみなみの手では行かれんもんでなあ。

あの人は、なかなかうまい事考^{おも}え居る。

証書を反古にするつもりで年限などを忘れさせる様にしとるんや。

東京の方へも云うてやつて、委任状もろうて、証書の書き換えをさせんならん。

なあ栄蔵はん、

この村も、金臭くなつて仕舞うた。

はたして、もう一寸の間で、証書が口を利かなくなりかけて居た。

馬場と栄蔵は、その書き換えにも相当骨を折った。

証書は書き換えても、かんじんの金のしがくは何もしなかった。

お金はお金で、時々太い、うねうねした文字で、

あなたの御手ぎわで、さぞその方の話はうま甘く出来る事と存じ候。

こちら先だつての金は、とうに、ちつともござなく、御承知の事とは思いますが、近い内に、あとの金を御送り下され度候。

などと云う葉書をよこしたりした。

いかにも人を馬鹿にした云い草や又、あまり見つともいい事でもないのにむき出した葉書でなぞ寄すよこのがたまらなく気にさわった。

一人ほか居ないこの村がかりの郵便配達が、さぞ可笑しい顔をしてあの一本道をよみよみ持つて来た事だろうと思うと、他人に知られずにすむべき内輪の恥がパツと世間に拡がった様な気がして、居ても立つても居られない様になった。

早速、その返事のかわりに、

あんな事を葉書でよこす馬鹿が何処にあるなどと云つてやったりした。

お君からの手紙は、事々に親を泣かせた。

辛い事を堪え堪えして居る様子が、たどたどしい筆行きにあらわれて、親の有難味が始めて分つたなどと書いてあつた。

お君の手紙のつくたびに栄蔵は山岸の方の話をあせつた。

けれ共、小意志の悪い若主人は、栄蔵があせればあせるほど、糞落附きに落ついて口でばかり法律臭い事を云つて、折々は却つて栄蔵の方がおどかされて帰つて来る様であつた。

栄蔵は、日暮方から山岸に出かけて、帰途についたのはもう日暮れ方であつた。

田圃道をトボトボと細い杖を突いて歩いて行つた。

あの小意志の悪い若主人が机を前にひかえて、却つて栄蔵をせめる様な口調でいろいろ云う様子を思いながら、遠くの方の森の上を見ながら歩いた。

寒い風が、浪の様にドーツと云つてかぶさつて来る。道の両側の枯草が、ガサガサ気味の悪い音をたてて、電線がブーン、ブーンと綿を打つ時に出る様な音をたててうなる。

何の曲りもない一本道だけに斯うした天気の日歩くのは非常に退屈する。

いつもいつも下を見てテクテク神妙に歩く栄蔵も、はてしなく真直につづく土面を見あ

きて、遠い方ばかりを見て居た。

五六軒ならんだ人家をよぎると又一寸の間小寂しい畑道で、漸くその竹藪の向うに、家の灯がかすかに光るのを見られる所まで来て、何となし少しせいた足取りで六七歩行くと、下駄の齒先に何か踏み返してあつと云う間もなく、ズシーン、いやと云うほど尻餅をついてしまった。

只ころんだけだと思つてフイと起き上ろうとしたがどうしても腰が切れなかった。

二三次試みて居るうちに、頭の中央と亀の尾の辺が裂けそうに痛んで来た。

片手に杖を握り、片手に額をささえて両足を投げ出したまま痛みの鎮まるのを待った。町に出るものもなし、子供も食事に引き込んで居て栄蔵の周囲には、小鳥一羽も居なかった。

冷い風が北から吹いて来て土面について居る脚や腰を凍らす様にして行く。

痛さは納まりそうにないので、体の全力を両足に集めて漸く立ちあがり得た栄蔵は、体を二つに折り曲げたまま、額に深い皺をよせて這う様にして間近い我家にたどりついた。

土間に薪をそろえて居たお節は、この様子を見ると横飛びに栄蔵の傍にかけよって、
「まあどうおしたのえ。」

と云うなり手をとつて土間を歩かせ大急ぎで床を取つてやすませた。

「ま、ほんにどうおしたのえ、

ころびやはつたんか。

「何か踏み返してころぶ拍子に強く亀の尾を打つたらしい。

「亀の尾は、悪所やさかい。

と云つて居る間にも痛みと熱は次第に高まつて行つた。お節は額と打ち身の所に濡れ手拭をのせて足をさすつたり、手を撫でたりして居たが、手にさえ感じられる熱の高さにびつくりして医者を迎えに行つてもらうために、一番近い家まで裾をからげて走つて行つた。その若い者に用向を話すとすぐ、年を取つた女と思えない早さで我家に走り帰つた。

小一時間たつてから使の若者は医者を連れて来た。立居振舞が如何にも大風で、鳥なき里のこうもりの人望を一身に集めて居る医者は、ゆっくりゆっくり、亀の尾を打つた拍子にひどく脳に響いて熱が出たのだからそう大した事はないと云つて下熱剤を置いて行つてしまつた。

火の玉の様になつた栄蔵のわきで手拭を代える事を怠らずに、お節は二夜、まんじりともしなかつた。

四日五日と熱は一分位ずつ下って、十日目には手にも熱く感じない様になってお節は厚く札を述べて借りて居た計温器を医者に返した。

一日一日と頭ははつきりして行つたけれ共手足の自由がきかなかつた。

お節は、筋がつれたのだと云つて居るけれ共栄蔵はもつと倍も倍も重く考えて居た。

亀の尾を打つた者は、打ち様によつて死んで仕舞う位だからきつと、軀を動かす働きが頭の中から悪くなつてしまつたのだらうと思つた。

盲人だと云つてもいい位の体の上にまたこんな事になられては、生きて居る甲斐がない。栄蔵は、絶えず激しい不安におそわれて、自分の居る部屋の隅々、床の下、夜着のかげに、額に三角をつけた亡者共が、蚊の様な声をたてて居る様に感じて居た。田舎医者は、四肢の運動神経に故障の出来たわけが分らなかつた。

今日はよからう、明日はよからう、夫婦ともそれを空だのみにして居たけれ共十日二十日と立つ中にそれも絶望となつてしまつた。

奈落のどん底に突落された様な明暮れの中に栄蔵は激しい肉体の悩みと心の悩みにくるしめられた。

打つたところが、何ぞと云つては痛み、そこが痛めば頭の鉢まで弾けそうになつた。

何かして、フト手の利かない事を忘れて、物を握ろうとなどすると平にのぼした腕には何の感覚もなく一寸動こうともしないのに気がつく、血の出るほど唇をかねて栄蔵は凹んだ頬へ大粒な涙をボロボロ、ボロボロとこぼした。

家の行末を思い、二人の不幸な子の身を思い、空しい廃人となって只、微かな生を保つて居る自分を想いして、あるにもあらぬ思いがした。

運命の命ずるままに引きずられて、しかも益々苦痛な、益々暗澹たる生活をさせられる我身を、我と我手で^{なます}鱸切りにして大洋の^{あお}滄い浪の中に投げて仕舞いたかった。

始めの間は、家、子供、妻と他人^{ひと}の事ばかり思つて居た栄蔵は、終に、自分自身の事ばかりを考える様になった。

出来るだけ早くこの辛い世間から抜きたいと希う心、早く、無我の世界に入りたいと望む心が日一日と深くなつて行つた。

めつきり気やかましくなつた栄蔵に対してお節は実に忠実に親切にした。

こう云うのも病氣のため、ああ怒るのも痛みのため、お節の日々は、涙と歎息と、信心ばかりであつた。

気の荒くなつた栄蔵は、要領を得ない医者に口論を吹かける事がある。

「一寸も分らん医者はんや、

私はもう貴方の世話なんらんとええ、

どうせなおらんものに、金をすてて居られんわ。

さ、さつさとお歸り、

もう決して世話んならん。

五六度医者といやな思いを仕合つて栄蔵はたった一人の医者からはなれて仕舞つた。

腰と首根と手足の附け根に、富山の打ち身の薬が小汚くはりつけてあつた。

一月ほど立つて手は上る様になつたが指先が利かなかつた。

三度の食事の度んび、栄蔵はじれて涙をこぼしたり怒鳴つたりした。

栄蔵の体はいつとはなし衰弱して来た。

手足がむくんだり、時に動悸が非常にせわしい事などがあつたけれ共、お節は元より栄蔵自身でさえ心臓が悪くなつて居ると云う事は知らなかつた。

今はもう只一人の相談相手の達に一寸でも来てもらうより仕様がなと思つて、お節は人にたのんで今度の事をこまごまと書き、

「私もたった一人にて、何とも致し様これなく候故、何卒、十日ほどの御暇をもうて

一度帰つて来て御くれなされ度。
と云つてやった。

(七)

返事をよこさないで「達」は四日目の朝戻つて来た。

あちらに勤める様になつてからまだ一度もつづけて暇をもらつた事がないので快く許してもらえた事を話し肩に掛けて来たカバンの中から肉のかんづめやら西瓜糖やらを出し、果物のかなり大きい籠まで持つて来た。

お節は一言云つては涙をこぼして居た。

隣りで、「達」の声を始めて聞いた時栄蔵は、顔に血がのぼるほど一種異様な感じに満ちた。非常な喜びが心の中をはね廻りながらその陰には、口に云われない不快な感じがあった。

その不思議な感情を押えるために達が入つて来た時栄蔵は、額をしわだらけにして目をつぶつて居た。

父親が眠って居るのかと思つてそうつとまた出て行こうとする達を、

「達か、

戻つたんか。

と呼びとめた。

思いがけなかったので、達は少しあわてながら又元に戻つて、

「只今。

どんななんですか、

おつかさんに手紙をもらったのでびっくりして来ました。

と云つて父のげつそりとして急に年とつて見える顔をのぞいた。

「ほんにそうなんか、

出されて戻つたんやないか。

達は真赤になつて、母親に話した通り父の納得なっとくの行くまで弁解した。

「そうか。

そんならいいけど、

先達つての事があるさかいな、

気をつけんといかん。

栄蔵は、機嫌をなおして達の持つて来たリンゴのさくさく舌ざわりのいいのを喜んで、お節の止めるまで食べた。

リンゴを食べながらも栄蔵は、どうしても達が只戻ったのではなさそうだと想った。いかほど考えても一週間十日の暇のもらえる筈もなく、お節が来いと云つてやる筈もない。

彼は巧く私を胡魔化す積りと見える。

どう考えてもそうとしか思えないので、栄蔵はわざわざお節にお前ほんとに手紙で来いと云つたのかと尋ねたりした。

お節も保証したけれ共栄蔵には解せなかった。

達の若々しい体をながめながら一つ事ばかりを思つて居た。

「お前ほんとに大丈夫なんか。

夜になるまで四五度尋ねて、

お父さんどうしてそうなんです、

そんなに気になるならきいて御やりなさい。

と云われるほどだった。

その次の日から、一つ寝返りをうつにも若い男のゆったりした腕が、栄蔵の体の下へ入れられ、部屋の掃除などと云うと、布団ごと隣の部屋へ引きずって行く位の事は楽々された。

お節はこの力強い手代りをいかほどよろこんだか知れない。

「ほんにお前もいい若衆に御なりや。

惚れ惚れと鴨居に届きそうに大きい息子の体を見てお節は歎息する様な口調で賞めた。たまに見る息子は非常に利口に、手ばしこく、物分りがよく見えた。

ちよくちよく見舞いに来る者共に一々達の事を吹聴して、お世辞にも、

「いい息子はんを御持ちちやから貴方はんも御安心どすえなあ。

年を取つては、子のよいのが何よりどすさかい。

と云われればこの上なく満足して居た。

悲しい中にも後楯を得たお節は、前よりも一層甲斐甲斐しく何でも彼でもきり廻した。

栄蔵は、今まで、自分の心にこんな感情があるとは夢にも思わなかった或る感情に悩まされ始めた。

胸の張った、手足のすらりとし高い、うす赤い達の体が自分の傍にありと非常な圧迫を感じた。

一つ毎に、白い三日月みかづきのついた爪、うす紅の輪廓から、まぼしい光りの差す様な顔、つやつやしい齒、自分からは、幾十年の前に去ってしまった青年の輝やかしさをすべて持つて居る達を見る毎に押えられないしつとが起った。

親として子の体を「やきもちやく」と云う事は実に有得ない事である。

けれ共衰弱しきつて居る栄蔵には、前後の考えもなく只、うらやましかつた。

斯う力強いものが目の前にあると余計自分の命が危くなる様で、なるだけ、そばによせつけなかつた。

何が氣に入らないか教えて呉れと達が云つても返事もせず、体を動かしてもらう時、少し下手だと云つては、物も云わず、平手で達の手や顔を打った。

もうむずかしいと思えばこそ達はその病的な叱責にあまんじて居た。

達は、父の不快の原因をいろいろと考えたけれどもまさか、自分の肉体が、父の感情を害して居るなどとは思いつき様もなかつた。

発作的に息子を打って、そのパシツと云ういかにも痛そうな音をきくと、始めて我に帰

った様になつて、口をキーツと結んで打たれるままになつて居る息子を見て涙をこぼす事があつた。

お節は、疑がとけないであの様にするのだらうと思つていろいろ達のために云い解きをしたけれ共、

「そな事、よう分つとる、

云わんとええ。

と云つたきりである。

三人各々異つた心の中に住んで、深い夜にこめられた様な明けくれがつづいた。

達は、自分が何のためにこんな辛い日を送らなければならないか分らなかつた。

父親に喜ばれ様とこそ思え、あんなに目の仇の様にされ様とは夢にも思わなかつた。

四五日すると達は、そうと母親に、

「父さんは、僕の来たのがいやなんですねえ、きつと。

だから僕はもう明日あたり帰りましょう、

居ても何にもならないから。

と云つた。

けれ共、母親は、どうぞ居てくれとたのんだ。

「そら私も、お前の心は察します。

わざわざ優しくしてお呉れのにあんなひどくおしやはる心が一寸も分らん。

けど一寸の辛棒やさかいな、

大きい声や云われんが、

今度の病気が父はんの一番おしまいの病気かもしれへんさかいな。

私を可哀そうや思うたら、父はんといけ行かずといひから居とっておくれな。

泣きながら母親にすがられて達は、「それでも」とは云われなかった。

栄蔵は、細い弱々しいお節ばかりを傍によんで置いて夜もろくに眠らせなかった。

達は大抵の時、隣の間で、ぽつねんと粥の番をしたり本を読んだりして居た。

(八)

栄蔵が東京へ行く時に、大抵の金は持つて行ってしまった後へ、思わぬ事が持ちあがったので、お節はこまこました物入りにいろいろ苦しい工面をして居た。

けれ共、達は、自分が貯金から出して来た三四円の金を皆、お節にあずけて、帰る旅費だけあればあとは勝手にしてよいと云った。

始めの間は、息子が自分の力で得たものを親の身として貰う事は出来ないと堅く心^{かた}にきめて居たが、やはりいつとはなし心がゆるんで、つついそれももうなくなって仕舞った。栄蔵に云わないわけにも行かないのでお節は辛いのを押して夫にすべてを打ちあけた。土間の入口にある桐を売ると栄蔵は云った。止めてもそれより外に策がないのでお節も渋々同意して達を木屋の政と云う男を呼びにやらせた。

木屋の政の悪商法を知らないものはなかったけれ共その男の手を経なければ一本の木も売る事はむずかしかった。

翌日の夕方政はやつて来た。

絹の重ね着をして、年よりずつとはでな羽織を着、籐表ての駒下駄を絹足袋の□にひっかけて居る。

強い胡麻塩^{ごま}の髪をびったり刈りつけて、額が女の様に迫って頬には大きな疵^{きず}がある政の様子は、田舎者に一種の恐れを抱かせるに十分であった。

栄蔵の枕のわきに座つて、始めは馬鹿丁寧に腰を低くして、自分の出来るだけは勉強し

よ、病氣はどんな工合だなどと云いながらそれとなく家内を見廻して、どうしても今売らなければならぬ羽目になつて居る事を見きわめる。

そして彼特有のずるい商法が行われるのである。

栄蔵は、木なりを見て来た「政」に、年も食つて居る事だし、虫もついて居ないのだから、^{やす}廉く見つても七八十円がものはあると云つた。

仔細らしくあの枝を見、この枝を見て「政」はこの木はどう見ても、三四十円ほか値打ちがないと云い張つた。

この木の肌を見るの、枝の差しぶりを見るのと立派な理屈——「栄蔵は木なりを見る目が利かない男だ」をならべたてて、私が出来ただけ出して五十円だと云い切つた。

「それに何ですよ貴方、

町方なら斯う云う木もどんどん出ましようがここいらではそう行きませんからねえ。何年ねかして置くかしのものを、まあいわば、永年の御親^{した}しずくでいただくんですから。

三四十円のを五十円で手を打ちましよう云うのは、非常に商売氣をはなれたことです。

それでおいやだったら御ことです。

これだけ云つて政は、煙草をスパスパふかして一言も口を開かない。

五十円などとはあまりの踏みつけ様だ、いくら自分が目利きでないからって、これ位の事は分ると栄蔵は上^の氣^ほせた顔をして反対した。

それなら、今売るのをやめて、どつかからそれより高く買う男の来るのを待つてらしたらよからう。

と意志悪く、政は帰る様な氣振りを見せたりした。足元を見こんで、法外な事はしないが、いいと栄蔵は怒つたけれ共、冷然と笑いながら、

「人の足元を見ないでいい商売は出来ませんやね。

と云つた。そしてとうとう桐は五十円で落されてしまった。

紫の雲の様に咲く花ももう見られないと達は、その木の下で、姉と飯事をした幼い思い出にひたつて居た。

政が帰つてからも栄蔵は非常に興奮して耳元で鼓動がするのを感じて居た。

お節を前に置いて栄蔵は、政を罵つて居るうちにフトお節の懷に何か手紙の入つて居るのを見つけた。

「何んやお前の懷に入つとる手紙は、

早うお見せ。

お節は、ハツとして懷を両手でしつかり押えた。

そして震える声で、

「貴方お見なはずといい手紙なんやからな、

達によませて事柄だけきかせまつさかい。

と云つたけれ共、栄蔵はきかなかつた。

どうしても見せろと云つてきかないのでお節は仕様事なしに封を切つて、始めから、栄蔵の方へ向けて繰りひろげて行つた。

お金のところから来た手紙はこれまで一つもあまさず皆、針箱の引出しの中に入れて見せなかつたのにこればかりは、政が来て居たのにまぎれて懷になど入れて置いて……取りかえしのつかない事をして仕舞つた。

お節は、半切れの紙に、色の変つて行く栄蔵の顔を見て目をあいて居られなかつた。しまいまで読み終るといきなり破れる様な声で、

馬鹿！

馬鹿野郎、

人が病気で居ればいい玩具や思うて勝手な事云うてさいなみ居る。

出したけりや早う、夫婦共に出すがええ、

人でなし。

と云った。

お節は涙をボロボロこぼしながら、

マアマアそう云わんで。

と云ったけれ共、そんな事は何にもならず、息を弾ませて、ハアハア云いながら、床の上にバターン、バターンと手や足を投げつけては、大声で早口に、ふだんの栄蔵にはさかさになつても出来そうにない悪口を突いた。手を押えてしずまらせ様とした達は、拳で顎をぶたれて痛さに涙を一杯ためながら、あばれるにつれて身をかわしながら手を押えて居た。

ウウウウ

ハアハア

胸はひどく波打って居た。

覚えとれ、鬼め。

ほんにほんに憎い女子おなごやどうぞしてくれる、わしは子供の時からお主にひどい目に会わされてる。

断片的に、上ずった声で叫んだ。

その恐しい様子に手の出し様のないお節は顔をそむけて自分の不注意から出来たこの事を悔む涙にむせんで居た。

長い間、あばれた栄蔵は疲れた様に次第にしずまった。
なが

少しの砂糖水をのんだ後は、近頃に珍らしい大きないびきをかいて眠りに入った。

お節は涙の中にそのいびきをきいてかすかな微笑をもらした。

あばれた御かげで疲れやしたんやろ、

明日はけつとようなりやすやろなあ。

お節は涙を拭いて音をたてずにあちこちと物を片づけ土鍋に米をしかけてゆると足をのばした。

「ほんにまあ、珍らしい事やなあ。

今日が楽しみや。

達も、顎の痛さを忘れるほど軽い気持になった。

自分は次の間に、お節は父親のそばに分れて部屋を暗くすると二人ともが安心と疲れが一時に出て五分とたたない中に快きそうな寝息をたてて居た。

翌朝いつまでも栄蔵は起きなかった。お節があやしんで体にさわった時には氷より冷たくこわば強つてしまつて黒い眼鏡の下には大きな目が太陽を真正面に見て居た。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十九卷」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

1986（昭和61）年3月20日第5刷

初出：「宮本百合子全集 第二十九卷」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2008年9月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

栄蔵の死

宮本百合子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>